

# 心理的インスリン抵抗性を克服するための要因を解明 ：日本人 2 型糖尿病患者を対象とした質的研究から

名古屋大学大学院医学系研究科地域医療教育学寄附講座の岡崎研太郎特任准教授と高橋徳幸特任助教からは、日本人の 2 型糖尿病<sup>\*1</sup> 患者においてインスリン治療を開始する動機付けとなるテーマを報告しました。

糖尿病の患者にとって、インスリン注射を開始するには心理的なハードルが高いことが知られています。今回、7 カ国の国際共同研究に参加した日本人患者のうち 6 人に電話インタビューを実施し、インスリン注射開始前後の考えや認識、関連する要因の理解と、反応の背後にある理由を探索しました。インタビューデータは、名古屋大学教育学部の大谷尚名誉教授が開発した Steps for Coding and Theorization (SCAT) と呼ばれる質的研究手法を用いて分析しました。

分析の結果、インスリン導入に影響を与えるテーマとして、1.インスリンが適切な治療法であるという医療者からのアドバイス、2.インスリンペン・針の使い方や注入方法に関する医療者によるデモンストレーション、3.インスリンに対する諦念／降伏／受容の 3 つが抽出されました。

インスリン注射を勧める際には、医療者はこれら 3 つのテーマに基づき、インスリンの有用性を説明し、注射の手順を実演して説明することが重要だと明らかになりました。また、治療開始の理由として、インスリンに対する諦念／降伏／受容が確認されましたが、これは、「インスリン注射以外の選択肢はないと感じる」「しかたがない」などの発言に基づいており、日本人患者に特有のテーマとして注目に値するものと考えられました。

本研究は、インスリン注射の開始に消極的な日本人 2 型糖尿病患者に対して、医療者が基礎インスリン療法を開始する際に、重要となる情報を提供するものです。

本研究成果は、2022 年 3 月 4 日に学術雑誌「Primary Care Diabetes」のオンライン速報版にて掲載されました。

なお、この研究は、イーライリリー・アンド・カンパニー（米国）とベーリンガーインゲルハイム（ドイツ）からの研究費の支援を受けて実施されました。

## ポイント

- 電話インタビューにより、日本人 2 型糖尿病患者におけるインスリン開始の動機づけとなる要因を明らかにした。
- 医療従事者の行動は、インスリン開始に対する消極性を緩和するのに役立つ。
- 日本人では、インスリンを開始する理由として、諦め／降伏／受容という要因も見いだされた。

## 1. 背景

日本における2型糖尿病は、大きな懸念事項であり、人口の高齢化により今後数十年の間にさらに増加すると予測されています。食事療法、運動療法、体重管理などのライフスタイルの変化に加え、経口糖尿病薬や注射薬での治療が行われます。2型糖尿病は進行性であるため、最終的には多くの患者で血糖コントロールを維持するためにインスリン注射が必要となります。インスリン治療は適切に血糖コントロールができる割合が高いのですが、治療開始が遅れることがよくあります。この遅れは心理的インスリン抵抗性<sup>\*2</sup>として知られ、いくつかの研究で検討されています。心理的インスリン抵抗性は、臨床的惰性やインスリンに関する知識不足などの医師関連因子と、注射への恐怖、体重増加や低血糖への恐怖、インスリンの利点に関する誤解、個人的失敗感などの患者関連因子が原因であると報告されています。

しかし、インスリン治療開始を支援する効果的な戦略に関する研究は限られており、日本人2型糖尿病患者における心理的インスリン抵抗性を記述した研究も少ないのが現状です。

## 2. 研究成果

当初はインスリン注射に躊躇していた患者が心理的抵抗感を克服して治療を開始できるようになった要因として、大別すると3つのテーマが浮かび上がりました。(図)

### 1. 医療者からインスリンが適切な治療法であるという助言を受けたこと

インスリン治療の開始を決心する際には、信頼関係のある医療者からの助言が重要であると考えられました。患者は、インスリンの利点と潜在的な欠点を比較した医療者による説明が、インスリン治療を開始する決定に効果的であったと述べています。また、患者と医療者との信頼関係は、医療者が患者の状況を理解し、インスリン治療が最適であることに合意することと同じく、患者にとって重要でした。医療者が、患者の性格に合ったアプローチができ、高いコミュニケーション能力を持っていることも、重要とされました。

### 2. 医療者が患者にインスリンペン・針を見せ、注射のプロセスを実演したこと

患者は、注射の手順そのもの、インスリン注射にまつわるスティグマ、痛みへの恐怖が、インスリン治療開始を決断する際に障害になったと回答しています。さらに、治療開始時の医学的知識、病状の認識・受容、医師の理解の間にはギャップがあります。これらのギャップが、インスリン治療開始への抵抗感を助長しています。患者にとって、インスリンペンや針の実物を用いたインスリンの使用法の教育や実演は重要であり、説明や画像よりも説得力があり、インスリン治療に対する先入観や不安を和らげるのに有効でした。また、医療者のサポートを受けながら、自分でインスリン注射をすることが有効であったと報告されています。

### 3. インスリンの投与以外に治療の選択肢がないと感じたこと、インスリンに対する諦念・降伏・受容

「他の治療法がうまくいかず、インスリン治療を開始せざるを得なかった」「インスリン注射療法は、しかたがないと覚悟している」というような回答が4人からありました。特に血糖値のコントロール状態がよくない、もしくは全身の状態が低下している場合に顕著でした。また、他の重篤な疾患の診断な

どによるライフスタイルの変化がインスリン治療を開始するきっかけになることもありました。医師のサポートを受けながらインスリン治療を開始すると、予想に反して肯定的な経験をすることもあります。

諦念・降伏・受容は、西洋文化では否定的で弱々しい心の状態を意味しますが、東洋文化ではより複雑な意味を持ち、一般に望ましい性質とみなされています。諦念・降伏（日本では「あきらめ」と呼ばれます）は多層的な心理的・文化的意味を持つ特定の防衛形態であり、自我の文化特異的適応的防衛操作であると述べている研究者もいます。

## 図：インスリン治療への心理的抵抗感を克服するための3つのテーマ



1. 医療者からの適切な助言



2. 医療者によるインスリンペンや針の実物提示と注射プロセスの実演



3. インスリンに対する諦念・降伏・受容

### 3. 今後の展開

インスリン注射の開始に消極的な日本人2型糖尿病患者に対して、医療者が基礎インスリン療法を開始する際に、重要となる情報を明らかにすることができました。

今後は、こうした情報に基づいた医療者対象のワークショップ実施を計画しています。ワークショップでは様々な背景を持ち、様々な理由でインスリン注射の開始に躊躇している患者のケースを設定し、参加者によるロールプレイを取り入れる予定です。ワークショップに参加した医療者が、コミュニケーション能力を高め、患者と適切な関係を構築し、最適な関わりができるようになることが期待されています。

### 4. 用語説明

\*1 2型糖尿病：もっとも一般的な糖尿病の種類。日本人の糖尿病患者は、その多くが2型糖尿病と診断されています。

\*2 心理的インスリン抵抗性：現在のところ、インスリン治療は注射という方法しかありません。このインスリン治療を医療者から勧められた際、糖尿病患者が感じる抵抗感を心理的インスリン抵抗性と呼んでいます。

## 5. 発表雑誌

掲雑誌名 : Primary Care Diabetes

論文タイトル : Key factors for overcoming psychological insulin resistance: a qualitative study in Japanese people with type 2 diabetes.

著者 : Kentaro Okazaki<sup>a</sup>, Noriyuki Takahashi<sup>a</sup>, Tomotaka Shingaki<sup>b</sup>, Magaly Perez-Nieves<sup>c</sup>, Heather Stuckey<sup>d</sup>

所属 :

a: Nagoya University Graduate School of Medicine

b: Eli Lilly Japan K.K.

c: Eli Lilly and Company

d: Pennsylvania State University, College of Medicine

DOI : 10.1016/j.pcd.2022.02.009

English ver.

[https://www.med.nagoya-u.ac.jp/medical\\_E/research/pdf/Pri\\_220316en.pdf](https://www.med.nagoya-u.ac.jp/medical_E/research/pdf/Pri_220316en.pdf)